

なぞなぞ青いつぼ

小野 みふ

由香はため息をつきながら、魚の絵がかかれた青いつぼを本だなに置いた。お父さんが海外に行って、町のはずれのこっとう屋さんで買ってきてくれたんだ。

「なによ、こんなもの。かわいいアクセサリーがほしいってお願いしたのに」

おこって部屋から出ようとしたら、ふと呼び止められた。

「ちょっと待って。ぼくたちを海に返してくれよ」

「えっ？」

びっくりしてふり返ってみても、だれもいない。すると、青いつぼから、大きな水しぶきがあがった。

おずおずと中をのぞいて、はっとした。

「あっ、魚の絵が消えちゃってる！」

いつのまにか水がなみなみとはられ、キラキラ光りかがやく青い魚が二匹、元気よく泳いでいるではないか。

「うそっ。まさか、本物の魚になっちゃったの？」

由香がふしぎそうにつぼをなでると、魚たちが口ぐちに言った。

「ぼくたち、遠くの美しい島でくらしてたんだ。だけど、人間につかまえられて、魔法をかけられちゃったのさ」

「おねがい、海に返してちょうだい」

さみしげな瞳にじっと見つめられて、由香は青いつぼを持ちあげた。

「わかったよ！ さあ、いこう」

チャプン、チャプン！

バスに十分ほどゆられて、おだやかな浜辺に着いた。空はうすべに色にそまり、ふきぬける風がはだ寒い。

由香は波打ちぎわに近づいて、青いつぼをななめにかたむけた。

「気を付けて帰るんだよ。がんばってね！」

「うん、助けてくれて、どうもありがとう」

二匹の魚は力強く尾びれをふりながら、清らかな海の中へ消えていった。

由香は家に向けもどると、空っぽのつぼを本だなにそっと置いた。

窓から差しこむ夕日にてらされて、キラキラ キラリン！ つぼの底で、なにかが光った。

(えっ？ 今度はなあに？)

おそるおそる、手をつっこんでみる。すると、あざやかな青いイヤリングが二つ入っていた。

「わあ、魚の形だ！ かわいいー」

由香はすばやく耳につけて、リビングに走った。お父さんにぎゅっとだきついて、にっこり。

「お父さん、だーいすき。すてきなプレゼントをありがとうっ」